

[特別寄稿]

17世紀以前の二重母音 -oi-

川口裕司

はじめに

初級フランス語では、綴り字-oi-は[wa]と読みなさいと教える。学習者は、この綴り字の読み方は例外的と考え、とくにそれ以上の関心を持つことはない。しかし実は、この綴り字をめぐるこれまで多くの研究が行われてきた。それはこの綴り字と発音の関係が歴史的に多くの疑問を惹起してきたからにほかならない。Chartres出身のAbel Matthieuは、*Devis de la langue francoyse* (1559)の中で、イタリアの諸方言とフランス語の発音の違いを説明した後に、フランス語の発音と綴りは、上品で礼節をわきまえているものの、書かれているようには発音されず、書くことと話すことは異なる慣習であると述べている。

(...) et à nostre françoys il n'avient point, pourquoy est il plus mignard et courtoys tant en la pronunciation qu'à l'escripture: toutesfois se trouve quelque difference entre les deux, en ce que nous ne prononcons pas tousjours comme nous escripvons, et que l'usage en à autrement ordonné, et nous enseigne autrement à faire, laquelle tient en main forte la maniere de parler, d'escrire, (...) (Matthieu 1559, p.33)¹

当時の文法家たちにとっても、綴り字と発音のズレは大きな関心事であった。

1 引用では当時の活字をできるだけ再現しているが、sと&、および鼻子音の略字は全て現代風に修正した。

-oi-は強勢のある開音節で、ラテン語のĒあるいはĪが時ともに変化したものである²。その音変化を跡づけると、[Ē/Ī > ei > oi > oe > ue / we > wa]³のようになるであろう。この一連の音変化はいくつかの疑問を提起する。①Ē/Īは、なぜ二重母音化したのか、②前舌母音-e-は、なぜ後舌母音-o-になったのか、③oiから[oe]、さらに[ue]となった原因は何だったのか、④[we]から[wa]への変化はいつ頃起きたのか、等々、議論の種は尽きない。本稿ではこれらについて、先行研究に若干の新たなデータを加えて分析を行う。

先行研究の中で、この問題を最初に詳細かつ具体的に考察したのは、Charles Thurot (1881) と Kristoffer R. Nyrop (1899) であろう。優れた先行研究であるが、読んでみて気づくのは、年代の異なる様々な文法家や文学者の証拠が列挙され、それらを一本の糸でつないで、音変化のプロセスが説明されているということだ。筆者はこの点に若干の疑問を抱いている。本当にこの一連の音変化は、そのような論理的道筋を経て起きたのだろうか。本稿では、16世紀の文法家たちの多様かつ詳細な証言を見つめなおすことで、この音変化を始まりから17世紀の入口まで跡づけてみようと思う。

1. 二重母音化: Ē/Ī > ei

上では音変化を [Ē/Ī > ei > oi > oe > ue / we > wa] のように、線状的なプロセスとして提示した。一連の音変化は法則に従って起きているかのようであるが、筆者はむしろ *Orígenes del español*, 1956, p.532 の中で Menéndez Pidal が述べた考え方に与する。あらゆる音変化には確かに集団的な傾向が認められるが、音変化を線状的にとらえられるのは、時間と話し手の階層を一つに限り、それらを点から線へと繋ぐ場合だけなのであり、実際には音変化は世代の間で複数の変異形が共存しながら、数世紀をかけて徐々に変化していくのだと思う。ただしここでは便宜上、Ē/Ī > ei > oi のように記述する。

話しことばのラテン語がロマンス諸語へと姿を変えていく中で、母音の長短

2 他にも -oi- に合流した変化はあるが、とりあえずは議論を簡略化して Ē と Ī だけを例示する。

3 慣習的にラテン語形は大文字で表記した。

が音韻的価値を失うと、代わって音節構造が母音に影響を与えるようになる。こうしてロマニアの東西分裂以前に二重母音化が起きた。PĚDE > PO pé, SP pie, CA peu, OC pè, AF piet, FR pied, IT piede, SA pe⁴、FŎCU > PO fogo, SP fuoco, CA foc, OC fuòc, AF feu, FR feu, IT fuoco, SA focu。これらの例から、強勢開音節におけるĚとŎの二重母音化は、ロマンス諸語の全てにわたってではないが、かなり広い地域で生じたことがわかる。二重母音化は、開音節構造と強勢が組み合わさった結果もたらされた音現象だったと言えよう(川口 1998)。

それに対して、SĚRU > AF seir, FR soir, OC ser、VĪA > AF voie, FR voie, OC via やSŎLU「唯一の」> AF seul, FR seul, OC sol、DŪOS > AF deus, FR deux、OC dosのような、強勢開音節におけるĒ/ĪとŌ/Ūの二重母音化は、後にフランス語が話されることになるガリア北部地域だけで起きた。この論考で問題となるĒ/Ī > ei>oiの音変化は、このように地理的に限定された音現象であった。

Ē/ĪとŌ/Ūの二重母音化は、フランス語が成立した時期に既に起きていた。たとえば、『ユーラリの続唱』にはbellezour (l.2) < BELLATIŌRE、sostendreiet⁵ (l.9) ‘(elle) soutiendrait’, mei (l.66) ‘moi’ 等の語が確認できる。このように、Ē/Ī > eiは、最古フランス語において、-ei-の綴り字で表記されていたことがわかる。10世紀頃の『ヨナの説教』にはreieil (l.95) ‘royal’, haveir (l.117) ‘avoir’, fereiet (l.140) ‘ferait’ 等が見られる。

最も古い時期のフランス語では-ei-の綴り字が用いられたわけだが、最古の非文学テキスト、すなわち公文書や証書においては状況が異なっていた。たとえば現存する最古の公文書、1163年にCambraiで発給された地代帳には、tieroit (p.1, l.1) ‘tiendraitの方言形’, trois (p.2, l.2, l.4), doiu[n]t (p.2, l.6) ‘doivent’のように、-oi-形が支配的である(Gysseling 1949)。この事実をどのように解釈すればよいのだろうか。文献のジャンルによる差とは考えにくい。むしろ地理的な要因なのかもしれない。北フランスでは12世紀まで主にラテ

4 ポルトガル語(PO)、スペイン語(SP)、カタルーニャ語(CA)、オック語(OC)、フランス語(FR)、イタリア語(IT)、サルデーニャ語(SA)、古フランス語(AF)。

5 半過去や条件法の語尾、接続法soit等は、-ei(e)t > [ɛ(ə)t] > -ait [ɛ] に変化したと思われるため、ここでの議論に含めた。

ン語が書写されていたことがわかっており、俗語と考えられていたフランス語は、13世紀になってようやく書写されるようになった。すなわち13世紀以前は、フランス語を使用した文書はイングランドのアングロ・ノルマン写本が主流だったのだ (Pfister 1973)。1120年頃に作成されたとと思われる『アレクシス伝』のL写本は、典型的なアングロ・ノルマン写本であり、reis (l.24) ‘roi’、seit (l.25) ‘soit’のように綴り字-ei-を用いた。一方、同写本では、他の語源に由来する語、une voiz (l.292) < VÖCE ‘une voix’やnoise (l.422) < NAUSEA ‘une noise’等の語で、綴り字-oi-を使用している。このことから、12世紀初頭の段階では、Ê/Ĭ > eiと-ÖCE/-AUSEA > oiが、まだ合流していなかったことがわかる。『アレクシス伝』からほどなくして書写されたとと思われる『ロランの歌』のOxford写本でも、li reis (l.1) ‘le roi’、mei (l.20) ‘moi’では綴り字-ei-が用いられ、voiz (l.1561) ‘voix’とla noise (l.1005) は綴り字-oi-であり、両者は厳密に区別されていた。

13世紀末に書かれたアングロ・ノルマン写本の*Orthographia gallica*のT写本では、roiやmoiの語に関して、-oi-あるいは-ei-と綴ることができるという記載があり、13世紀末になると、両方の綴り字が共存しており、綴り字-oi-を受け入れるようになったことを裏付けている。

Item moi toi soi foi Roi et similia possunt scribi per o vel per e secundum diversitatem et usum lingue Gallicane (ms. T, éd. Stürzinger, p.19) (Kristol 1989)

2. 後舌母音化: ei > oi

13世紀になり、北フランスでもフランス語を使用した写本活動が始まる。ChâlonsのScriptoriumで書写され、Vitry城代Huesが1234年に発給した文書がある。この文書では、savoir (l.1)、avoir (l.5)、moi (l.7, 14) のように、強勢開音節のÊ/Ĭに由来する-oi-の綴り字が支配的である。1236年にArgensolles聖母修道院が作成したSaint-Pol伯に関わる文書でも同じことが言える。これらのことからわかるように、北フランス語の文書では、13世紀には-oi-の綴り字が優勢であったことがわかる。

パリ出身のHenri Estienneは、*Hypomneses de Gallica Lingua*の中で、ラテン

語からフランス語に多くの音が入り入れられる際に、gloriaやmemoriaでは、gloire、memoireのように音位転換が起きた。他方、ラテン語のcredere、bibereは、crere、bereとなり、それがcroire、boireになったのだと説明する。

Cum his enim particulis earum quoque sonum ad nostram transiisse linguam existimo: ac postea, quum multis vocabulis è Latino sermone petitis eadem diphthongus per literarum transpositionem accommodata fuisset (veluti, quum Gloria in *Gloire*, Memoria in *Memoire* transiisset) substitutam etiam pro *e* in quibusdam fuisse adeo: vt (exempli gratia) ex *Crere* pro Credere, ex *Bere* pro Bibere, ex *Fé* pro Fide, ex *Lé* pro Lege, ex *Ré* pro Rege, factum fuerit, *Croire*, *Boire*, *Foy*, *Loy*, *Roy*. (Estienne 1582, p.47)

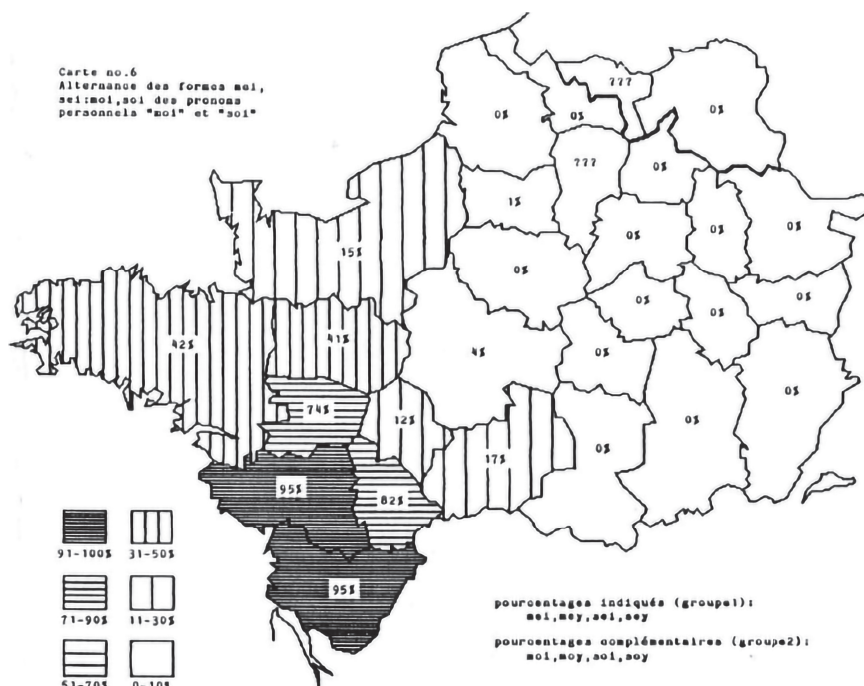
このcrereとbereを、それぞれcreire、beireと置き換えてみれば、Estienneのこの解釈は、Ê/Ī > -ei- > -oi- と音位転換による -ori- > -oir- の関係性を正しく説明していると言える。

Dees (1980) が行った13世紀の古文書の綴り字分析によると、-ei-と-oi-の綴り字の言語地理学的特徴が明らかになる。-ei-の綴り字は、Anjou、Touraine、Poitou、Saintonge、Bretagne、Normandie等の北フランスの西部地域に多く、これに対して東部地域に移動するにつれて、-ei-は少なくなり、-oi-の綴り字が支配的になる⁶。下図の縦横線が綴り字-ei-の地域で、数値は%を表す。

アングロ・ノルマン写本では、15世紀になっても依然として綴り字-ei-を用いていた。たとえば、1442年以降に作成された *Liber Donati*では綴り字-oi-が優勢である。しかしその一方で、-ei-を使って不定詞veier ‘voir’、現在形veie、veiez、veit、さらにfeire ‘foire’ 「市」 < FÉRIA と記載した (Merrilees et al, 1993, p.12)。Rohr (1963) が指摘するように、これらの地域においても、中央のフランス語の影響を受けた結果、15世紀には-oi-の綴り字を受け入れたようである。

北フランス西部地域と東部地域の間に位置するパリ周辺部では、おそらく

6 Dees (1980) のCarte No.6 “moi” et “soi”, Carte No.227 “conseil”, “soleil”, “appareil”, “orteil”, “sommeil”参照。



(Dees 1980, Carte No.6)

-ei-と-oi-の両者が混在する状況だったのだろう。実際、イル・ド・フランス地方には、Aulnay、Châtenay、Chesnayの地名がある一方、Aunoy、Aulnoy、Launoy、Châtenoy、Chénoyという地名が見られる (Kawaguchi 1990)。注意したいのは、 $\tilde{E}/\tilde{I} > ei$ が自発的にoiへと変化したのではないという点である。 $\tilde{E}/\tilde{I} > ei$ の変種と $\tilde{E}/\tilde{I} > oi$ の変種が、イル・ド・フランス地域で接触した結果であると考えるのが適切であろう (Schogt 1960, Lodge 2004)。

ところで、前舌母音の $\tilde{E}/\tilde{I}$ が二重母音化する際に、第1要素が後舌母音oに変化したわけだが、このような音変化はあまり一般的ではない。しかし、前舌母音が後舌母音化する可能性をHaudricourt (1949) が最初に指摘した。彼はフランス東部の方言を例に挙げ、前舌母音/e/が後舌母音/o/に変化することを説明した。これに対しては幾つかの議論が出された。Chaurandは、フランス北部のピカルディー方言において、 $ei > oi$ と $oi > o$ のような並行的音変化が見られ、これによってeiとoが混同されたと考える (Chaurand 1972, p.57)。

前舌母音/e/の後舌化の間接的な証拠として、Kawaguchi (1994) は、ラテン語の接尾辞-ĪTTAがパリ周辺部でどのような変異形を持っているか言語地図を用いて分析した。これによると、標準的な-ette形、Aube県に広がる-atte形、Haute-Marne県の-cutte形と並んで、-otte形がAube、Marne、Yonneの諸県に分布している (Kawaguchi 1994, p.429)。さらに、強勢開音節の接尾辞-et < -ĪTTU、例 le soufflet (de forge) についても、-at、-ot、-eutの変異形が-etteの場合と同じような分布でみられた (Kawaguchi 1994, p.430)。これらのことからパリ周辺地域では、/e/と/o/の変異形が同時に観察されたとしても不思議ではない。ラテン語の強勢開音節Ē/Īに由来する二重母音-ei-について、パリ周辺部においては最初の要素が後舌母音である-oi-を受け入れる下地があったと考えられる。さらに古フランス語の時期にĒ/Īに由来するavoir < HABĒRE、moi < MĒ、savoir < *SAPĒREだけでなく、半過去や条件法の語尾-oit、-roit、接続法形soit、voise等の語にも綴り字-oi-が一般化した。

古フランス語の時期に、-ei-変種と-oi-変種の接触がパリ周辺部で生じたことから、上で見たune voix < VŌCE やnoise < NAUSEA といった、Ē/Īを起源としない綴り字-oi-との合流が起き、両者は同じように綴り字-oi-で表記されるようになった。その後、古フランス語のvoizやnoiseは中英語に借用され、voice、voisce、woice、noise、noyse等の形で現れ、現在に至るまで後舌母音oを持ち続けた。当時の綴り字-oi-は [oi] と発音されていたに違いない。実際 Erasmus は、*De recta latini graecique sermonis pronuntiatione* (1528) の中で、-oi-はフランス人にとって最も親しみのある二重母音であり、明らかに母音oとiであると断言している。

oi diphthongus Gallis quibusdam est familiarissima, (...) Hic enim audis evidenter utramque vocalem o et i. (Erasmus 1528, p.71)

John Palsgraveも*L'Eclaircissement de la langue françoise* (1530) の第12章で、英語の単語boye「子供」、froyse「パンケーキの一種」、coye「不承不承の」と対照させながら-oi-の発音を説明した。

Oi in the french tonge (...) it is sounded lyke as we sounde oy in these wordes "a boye, a froyse, coye", (...) (Palsgrave 1530, p.13)

英語に入ったフランス語の発音を考えることで、当時の綴り字-oi-の音声を推測することが可能である。たとえば、リヨン出身のMeigretの説明によれば、フランス語の借用語royalとloyalの発音は [oi] であった。

En moins, royal, loyal, nous oyons euidentement en la prolation la diphthongue commencer par o et finir par i. (Meigret 1545, p.46)

Amiens出身のSylviusもまた、-oi-は [oi] を表すとしながらも、さらに進んで-oi-は、むしろ [oe]⁷であると述べている。

Advertes tamen oï vel oÿ diphthongum in his et propè reliquis pronuntiari, vulgo à Gallis hiatu immodico, et oë exprimi verius, quam oï vel oÿ, (...) (Sylvius 1531, p.106)

Vermendois出身のRamusによる *Grammaire* (1572) と、パリ出身のRobert Estienneの *Traicté de la grammaire Francoise* (1557) は、共に類似の表を作成して綴り字-oi-を説明する。ここではRobert Estienneの説明を例示する⁸。

E en OI : TELA, Toile; HÆRES, Hoir; STELLA, Estoile

I en OI : VIA, Voye; NIGER, Noir, Noire

OE en OI : PCENA, Poine; FCENUM, Foin

V en OI : CUNEUS, Coin, ou Coing; NUX, Noix; PUNCTUM, Point
(Robert Estienne 1557, p.91-97)

この表は綴り字-oi-の異なる語源を表している。EstienneとRamusが決定的に異なっているのは、Ramusはpoint等のように鼻子音の前にくる-oi-を除いて、全て-oë-と記載している点である。Ramus (1572) p.38参照。

綴り字-oi-の二つの変異形 [oi] と [oe] のほかに、Palsgraveは変異形 [oa] も挙げている。

(...) for sometyme lyke as we sounde oy in these wordes “a boye, a froyse, coye”, and such lyke, and sometyme they sounde the i of oy almost lyke an

7 [oe] でなく、おそらく [oe] であったことについては後述する。

8 原文は表形式である。ここでは表の一部を抜粋し、ラテン語は大文字にした。

a. (Palsgrave 1530, p.13)

-oi-の発音には、[oi] と [oa] の2つの変異形があるというのである。とくに後者の現れる音環境は、単音節語ではoys, oyt, oyxの時、たとえばboys [boa]、soyt [soa]、uoiz [voa]のような語であり、多音節語はfrancoys [-soa]、memoyre [-moar] ‘mémoire’、uictoire [-toar] ‘victoire’ 等である。大変興味深いことだが、これらはいずれもラテン語の強勢開音節のÊ/Īに由来しない綴り字-oi-である⁹。Palsgraveの説明を信じるとすれば、当時、Ê/Ī以外に起源をもつ-oi-において、-oi- > -oa-の変化が起きていたということになる。このことから上述のSylviusとRamusの解説にある綴り字-oi-は、実際には [oɛ] に近い発音だったと考えるのが理屈に合っている。さらにMeigretは以下の重要な指摘を行う。

Au contraire en moy, toy, soy, nous oyons la fin de la diphthongue, non seulement en *e*, mais encore, en *é* ouuert, qui est moien entre *a* et *e* clos, et par consequence bien estrange de la prononciation de l'*i*, ou *y* grec. Nous escrirons doncq loé, roé et loyal, royal. (ibid., p.46-47)

綴り字の-oi/oy-には、広い*e*をもった [oɛ] と、*a*と*e*の中間音の、おそらく [oæ] という変異形が見られ、綴り字-oi-からすると奇妙な発音だというのだ。Meigretはまた、半過去形3人称複数の語尾-oientも-oé-の発音になると述べている¹⁰。-sや-tが後続しない単音節語のloiやroiが [oɛ/oæ] と発音される点でPalsgraveの説明と異なっているが、Palsgraveの指摘した [oa] は、Meigretの言う [oæ] だったのではなかろうか。[ɛ] と [a/æ] の揺れについてEstienneは、大衆（特にパリの大衆）や宮廷人の発音を信用してはいけなくと注意する。彼らはPierre、Guerreと言う代わりにPiarre、Guarreと言うからである。さらに、elleをalleと発音すると付け加えている。

Hoc unum de ista prima litera addam, tibi in huius pronuntiatione neque

9 唯一、Ê/Īに由来するかもしれない半過去形disoyt [-zoa] ‘disait’が含まれる。

10 半過去形の3人称単複形に長短の区別があることは、Mons生まれのBosquetによる *Elemens ou institutions de la langue françoise* (1586) p.27にも同様の記載がある。

plebi, (vel potius faeci plebis) neque aulicis fidendum esse. Plebs enim (praesertim Parisina) hanc literam pro *e* in multis vocibus pronuntiat, dicens *Piarre*, pro *Pierre* (sive pro Petro, quod est proprium nomen, sive pro petra significante lapidem) quinetiam *Guarre* pro *Guerre*, (...) (Henri Estienne 1582, p.10)

また別の箇所では、宮廷人に言及はないものの、こうした発音は、パリの人が犯す一般的な誤りだと考えている。この場合、moas ‘mois’、foas ‘fois’、troas ‘trois’、poas ‘pois’のように、-r音が後続しない単語でも [ɛ] と [a] の揺れが起きている。

Ad illa verò quod attinet quae prima in exemplum attuli, *Mois*, *Fois*, *Trois*, *Pois*, monendus es de quadam ineptissima eorum aliorumque huiusmodi pronuntiatione: quasi nimirum literis *o* et *a* in diphthongum coeuntibus scriptum esset, *Moas*, *Foas*, *Troas*, *Poas*. Ita enim non pauci, errorem vulgi (Parisini praesertim) sequentes, pronuntiant. (Henri Estienne 1582, p.48)

いずれにしても、当時のパリ周辺部では、母音 [ɛ] はかなり広い [æ] あるいは [a] に近い音だったと思われる。別の言い方をするならば、母音音素 /ɛ/ と /a/ は揺れていたのである。Bourges出身のGeofroy de Toryも *Champfleury* の中で、パリの夫人は、若い人の習慣として、aとeを入れ替えて、Mon mery ‘Mon mari’あるいはPeris ‘Paris’と発音すると記している。

Au contraire les Dames de Paris, en lieu de A pronuncent E bien souuent, quant elles disent. Mon mery est a la porte de Peris, ou il se faict peier. En lieu de dire. Mon mary est a la porte de Paris ou il se faict paier. Teille maniere de parler vient dacoustumence de ieunesse. (Tory 1529, p.82).

3. o/uの揺れ: -oe- [œ] と -oue- [ue]

南仏Nîmes出身のJean Nicotが *Thresor de la langve francoyse, tant ancienne que moderne* (1606) の辞書を出版した時、彼はboisseauの項で、「Boisseauと書くけれども、Boësseauと発音される」と記載した。この単語の規範的な発音は、

当時、まだ [œ] であったことがわかる。

Boisseau, m.acut. Est une espece de mesure de choses arides, et la douzième partie du septier, et se divise en quatre onces, et le tiers d'une once, Boëtius, duquel mot Grec en estime qu'il soit fait. Aussi le prononce-on Boësseau, quoy qu'on l'escrive Boisseau. (...) (Nicot, 1606)

Palsgrave (1530) のF. Géninによる1852年版には、Table des règles et des mots pour la grammaire de Palsgrave¹¹が付加されており、そこにはboe 'bois'、moe 'moi'、battouer 'battoir'、fermouer 'fermoir'、mirouer 'miroir' 等の語が記載されている。綴り字-oe-だけでなく、-r音の前で-oue- [uɛ] という綴り字がある。

母音-o-が-ou-になる、いわゆるouïsmeの音現象は、16世紀よりはるか昔の、中世からずっと続いている発音傾向と言える。パリから遠くないシャンパーニュ地方南部の公文書では、鼻子音-m, -nの前、とくに無強勢音節において頻繁にouïsmeが起きていた。douné 'donné'¹² (93 [19] Bar-sur-Aube)¹³、dount, (84 [9] Troyes)、orrount 'orront' (91 [1] Saint-Valérien, ount 'ont' (16 [3] Clairmarais)、proumet (86 [17] Clairmarais) (Kawaguchi 2002, p.218)。しかし、他の音環境においても、chouse 'chose' (28 [11] Vignory), prouchien 'prochain' (93 [12] Bar-sur-Aube)、prouvenisiens 'provinois' (12 [3] Provins)、pruchien (100 [6] Sens)、voulenté (98 [10] Trânel) 等の綴り字が見られ、ouïsmeの起きていたことがわかる。

ouïsmeが生じたのは、ラテン語のŪが、強勢音節において、まず [u] に変化したし、さらに [y] へと中舌化したことによって母音体系の中から音素/u/が消失したためである。このことが引き金となって音素 /u/を補完しようとする体系的な力が生じたのだった (Kawaguchi 1987)。

11 このTable des règles et des motsは、英国で出版された版にはない。

12 この綴り字はアングロ・ノルマン方言に特徴的な-oun-とは無関係であると考えられる。

13 93 [19] Bar-sur-Aubeは、Bar-sur-Aubeで作成された文書で、Coq (1988) の文献93番の19行目を表す。以下同様。

フランス語成立前の母音体系		[u] > [y] の後の母音体系	
/i/	/u/	/i/	/y/ ← /ou/
/e/	/o/		↑
/ε/	/ɔ/	/e/	/o/
	/a/	/ε/	/ɔ/
			/a/

体系の力学により、*TÖTTU > tot > tout、DIÛRNU ‘jour’ > jor > jour、MÛLTU ‘beaucoup’ > molt > mout等の変化が生じることで、母音/u/の空白が埋られたのだった。上に挙げたchouse ‘chose’ < CAUSAは、この体系力学の中に巻き込まれたことで、本来は [o] である筈の母音が [u] になった例と言える。

一方、Le Mans出身のJacques Peletier du Mansは、-o-と-ou-の揺れを地域の変異とみなしているが、この現象は地域性とは関係ないものとするのが妥当であろう。

l'è pris gardē quelquefoes a cela, e è trouuē que c'ët lē vicē dē certains païs, commē dē la Gaulē Narbonnoese, Lionnoese, e de quelques adroez de l'Aquiteinē: ou iz disēt le haut bot ‘bout’, un huis ouert ‘ouvert’, du vin rogē ‘rouge’: Aucontrerē, un mout ‘mot’, unē chousē, e des pourreaux ‘porreaux’.
(Peletier du Mans, *Dialoguē Dē l'Ortografē e Prononciation Françoeise*, 1550, p.31)

13世紀以前の北フランスではフランス語で文書が作成されることは稀であったと述べた。実際、フランス国王が最初に発給した文書は、1241年のPontoise文書であった。1280年以前に国王が作成させた6文書を調べたところ、1268年の尚書局文書にheir (4) と heirs (3)¹⁴ < HĒRĒSが出てくる。一方、1254年のSeine-Saint-Denisと1259年のParisの文書にはhoir (6) と hoirs (26) が記録されている。また1268年にはleial (1) cf. AF loialが、1254年と1271年Parisの文書にはanceis (2)、anceiz (1) cf. AF ançois < *ANTĪSCU (?) があり、1259年と1271年にconseil (4) cf. AF consoil < CŌNSĪLIU が現れる。

14 () 内は出現回数。

16世紀の文法家の記述から、こうした-oi-と-ei-の混乱が大規模かつ頻繁に起きていたことを立証することは難しい。パリ民衆に観察される-oi-と-ei-の混乱に対して、Vézelay出身のThéodore de Bèzeは非難の急先鋒であった。彼は、*De francicae linguae recta pronuntiatione*の中で、パリの民衆発音を真似て、voirre, foirre, troisをそれぞれ、voarre, foarre, troas, trasと書いたり、発音したりする輩を、*corruptissime vero*と厳しく批判した。

Corruptissimè verò Parisiensum vulgus Dores plataizontas¹⁵ imitati, pro, voirre, vitrum: sive vt alij scribunt, verre, foirre, palea farracea: scribunt et pronuntiant voarre, et foarre: itidémque pro trois, tres, troas, et tras. (Bèze 1584, p.48)

Sylvius (1531) とトゥーレーヌ地方出身のPérion (1555)、さらにHenri Estienne (1582) は、それぞれ-oi-と-ei-の混同を指摘しているが、むしろ混乱は、話者の方言に由来するものとする。

Desinant igitur Picardis, puritatem linguae et antiquitatem integrius seruantibus illudere Galli quòd dicant mi, ti, si raro: et mè, tè, sè, à mihi vel mi, tibi, sibi, vel ti, si, analogia primæ personae. (Sylvius 1531, p.21)

Picardi enim moi ita, vt si mi scriptum esset: Normanni autem, vt si me esset, pronunciant. Atque hoc modo scribenda sunt verba, in quorum origine i erit, si o praeterea adiungi oportebit. Si autem e sit in origine, e retinebitur, vt mensis moés scribam, non mois vel moys, praesertim cùm à Graeco μής ortum esse videatur. (Périon 1555, p.123)

Crere pro Credere, ex Bere pro Bibere, ex Fé pro Fide, ex Lé pro Lege, ex Ré pro Rege, factum fuerit, Croire, Boire, Foy, Loy, Roy. Ac certè quod dico verisimile reddunt etima dialecti quae hodiéque illa, Fé, Lé, Ré, vsurpant. (Henri Estienne 1582, p.47)

15 plataizontas はギリシア文字。

今日のフランス語ではFrançaisとFrançois、anglaisとdanois、raideとroideの例からわかるように、-oi-と-ai- (= ei-) の綴り字の混用が起きていたことがわかる。両者の混乱は、-oe-/ -oue- [oɛ] / [uɛ] の第1要素が脱落し、[ɛ] になった結果生じた。この場合、最もありそうな音変化のプロセスは、まず二重母音-oe-がouïismeによって-oue-になり、次に第1要素が半子音化して [wɛ] となったために、後に脱落したと考えるのが適切なように思える。

Saint-Quentin 出身の Charles de Bovelles の *Liber de differentia vulgarium linguarum et Gallici sermonis varietate*によれば、子音-lに先行する音環境で、-oi-は-ei-になっていたことがわかる。以下のconseil < CŌNSĪLĪU, soleil < *SŌLĪC(Ū)LŪ, pareil < *PARĪC(Ū)LŪを参照。

(...) vti in his, Iay, Ay, Feray, Irai, Conseil, Soleil, Pareil, Veille, Oseille, Roy, Voix, Roisin, Voisin. (Bovelles 1533, p.22)

Pelletier du Mans は、*Dialogue De l'Orthographe e Prononciation Francoese* (1550) の中で、最近では半過去形の語尾が [ɛ] となり、Roine「女王」を Reineとも言い、これは宮廷人も同様であると述べている。

Les vns disēt reīnē les autrēs roīnē: Mémēs a la plus part des Courtisans vous orrez dirē, iz allēt, iz vēnēt, iz alloēt, iz vēnoēt. (Pelletier 1550, p.132-133)

Lodge (2010) も指摘するように、16世紀の文法家たちの記述では、半過去形をしばしば-ai-/ -e-と表記していることから、古い半過去形語尾-oi-は、16世紀あるいはそれ以前に、-ai-/ -ei-に取って代わられたのだろう。そして半過去形の [ɛ] が規範となることで、-oi-と-ei-の混乱はより決定的となった。Henri Estienne (1582) は、soye, poivre, voyez等の様々な語で、-oi-と-ei-の混用を観察した。ただし上に引用した例のように、Estienneは、古い時代にはFoy、Loyでなく、Fé、Léと言っていたという風に、-ei-を年代的に古い形と考え、今でも幾つかの方言ではFéやLéであると述べる。Estienneにとって両者は、旧形と新形が共時態の中で併存している状態であった。Estienneだけでなく、他の文法家たちも、この現象が-ei-変種と-oi-変種がパリ周辺部で接触し、同時代的な併用現象をもたらしていたとは考えていなかったようだ。

Itidem verò non Foy et Loy, sed Fé et Lé priscos dixisse (sicut et quaedam

dialecti etiam nunc) credibile est: praesetim quum *Leal* (ita factum ex *Lé*, ut *Loyal* ex *Loy*) nondum omnino in desuetudinem abierit, ne apud eos quidem qui alioqui *Loy* non *Lé* pronuntiare solent. Constat quidem certè priscos illos *See* non *Soye* dixisse, et *Veez* non *Voyez*. Fortasse autem duae simul mutationes à posteris in quibusdam vocabulis factae fuerunt, quum illis hanc diphthongum darent. Nam (exempli gratia) credibile est maiores nostros non *Poivre* disisse sed *Pepre*, ex *Piper*, postea *Pevre* (mutato *p* in *v*, sicut in aliis quam plurimis) tandem verò *Poivre* dictum fuisse. (Henri Estienne 1582, p.149-150)

結論にかえて

こうして16世紀が終わり、17世紀になってイギリス人のPeter Erondellは、*The French Garden, being an instruction for attayning the French tongue* (1605) の中で、最近の興味深い発音傾向について触れた。

An other Observation, newly noted. Whereas our Countrymen were wont to pronounce these wordes, *connoistre* to knowe, *apparoistra* it shall appeare, *Il parle bon François* he speaketh good French, *Elle est Angloise* she is an English-woman, as it is written *oi*, or *oy*: now since few yeares they pronounce it as if it were written thus, *coonnétre*, *apparétré*, *fraunsés*, *Aungléze*. (Erondelle 1605, p.40)

17世紀には、古い規範の*connoistre*, *apparoistre*, *françois*, *anglois*は背景に退いて、現在の規範*connaître*, *apparaître*, *français*, *anglais*が一般化しつつあったのだろう。少なくともErondellはそうした言語変化の現れを感じ取った。少し後にBlois出身のCharles Maupasは、*Grammaire et syntaxe française* (1618) の中で、本来は[œ]と発音するべきところを、近年になってフランス語を正しく発音できない外国人の誤りを真似ねた発音の墮落が生じており、その誤った-ai- [ɛ]の発音は、王宮においても蔓延していると警鐘を鳴らしたのだった。

oi, ou oy, la naïve et vraye prolation de cette diphthongue devroit estre quasi comme æ, e, ouvert ainsi *foy*, *loy*, *Roy*, *voir*, *trois nois*, etc. Mais la dépravation

qui s'est rampee depuis quelques anneés en ça, l'a grandement brouillee et renduë incertaine. Car on s'est pris à la proferer comme *e* ouvert, ou plustost comme la diphthongue *ai* en ces mots, *Mais, jamais faire plaisir*. Ce qui est survenu à la Cour du Roy, à mon opinion, par une folle imitation des erreurs des estrangers qui ne sçachans bien prononcer nostre langue, la corrompent; Et les courtisans, singes des nouveautez, ont quitté la vraye et anciéne, pour contrefaire le baragoin estrangier. Mais les Doctes et bien-disans, és Cours de Parlement et ailleurs, retiennent tous-jours l'antique et naïve. (Maupas, 1618, fol.16r-16v)

最後に冒頭で挙げた疑問について考える。まず、Ê/Ĭ の二重母音化は母音の長短が音節構造の違いに変化したことと関連する。しかしこの二重母音化が北仏地域のみで起きた原因は不明である。パリ周辺において中世期に *ei* と *oi* が共存したことの背景には、*/e/* と */o/* の交替があった。一方、*[œ]* と *[uε]* の揺れは明らかに *ouïsmé* が関係している。*[œ/wε]* と *[oa/wa]* は、おそらく16世紀以前からみられ、その背景には */e/* と */a/* の揺れがあったと思われる。これらの疑問点をさらに解明するためには、中世から16世紀までのパリ周辺部における */e/-o/* の交替、*ouïsmé* の実態、*/e/* と */a/* の揺れがどのようになっていたのかを分析する必要がある。

参考文献

- Ayres-Bennett, Wendy (2004) *Sociolinguistic Variation in Seventeenth-Century France Methodology and Case Studies*, Cambridge University Press.
- Ayres-Bennett Wendy et Magali Seijido (2011) *Remarques et observations sur la langue française. Histoire et évolution d'un genre*, Classique Garnier, Paris.
- Chaurand Jacques (1972) *Introduction à la dialectologie française*, Paris, Bordas.
- Clerico Geneviève (1999) "Le Français au XVIe siècle", in *Nouvelle Histoire de la Langue Française*, J. Chaurand (eds), Seuil, Paris, 146-224.
- Coq Dominique (1988) *Documents Linguistiques de la France (série française)*, III, *Chartes en langue française antérieures à 1271 conservées dans les départements de l'Aube, de la Seine-et-Marne et de l'Yonne*, Éditions du CNRS, Paris.

- Dees Anthony (1980) *Atlas des formes et des constructions des chartes françaises du 13e siècle*, Tübingen, Max Niemeyer.
- Gysseling Maurits (1949) “Les plus anciens textes français non littéraires en Belgique et dans le Nord de la France”, *Scriptorium* 3, 190–209.
- Haudricourt André G. (1949) “Problèmes de phonologie diachronique (Français El >OI)”, *Lingua* 1, 209–218.
- Kawaguchi Yuji (2002) *Recherches linguistiques sur le champenois méridional au moyen âge – Aspects phonétiques et graphiques –*, Atelier national de reproduction des thèses, Lille.
- 川口裕司 (1998) 「フランス語の歴史を刻んだ音変化—有声化・二重子音の単音化・二重母音化—」, 『フランス語を考える』, 三修社, 288–298.
- Kawaguchi Yuji (1994) “Suffixe –ette (< lat. –itta) en Champagne et en Brie à la lumière des Atlas Linguistiques”, *Zeitschrift für romanische Philologie*, 110 (3–4), 410–431.
- Kawaguchi Yuji (1990) “EI > OI > WA en français Pour reconnoître la diffusion du langaige”, *Recherches Linguistiques pour A. Martinet*, Tokyo University of Foreign Studies, 41–82.
- Kawaguchi Yuji (1987) “Systèmes distincts, fluctuations ou variantes graphiques en ancien champenois”, *La Linguistique* 23/2, 87–98.
- Kristol Andres Max (1994) “La prononciation du français en Angleterre au XVe siècle”, in *Mélanges Michel Burger*, J. Cerquiglini, et O. Collet (éds), Droz, Genève, 67–87.
- Merrilees Brian and Sitarz-Fitzpatrick Beata (1993) *Libert Donati A Fifteenth-Century Manual of French*, Anglo-Norman Text Society.
- Lodge R. Anthony (2004) *A Sociolinguistic History of Parisian French*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Menéndez Pidal Ramón (1956) *Orígenes del español, estado lingüístico de la Peninsula ibérica hasta el siglo XI*, Cuarta Edición, Madrid.
- Nyrop Kristoffer R. (1899) *Grammaire de la langue française*, Tome 1, Det Nordiske Forlang, Copenhagen.
- Pfister Max (1973) “Die sprachliche Bedeutung von Paris und der Ile-de-France vor dem 13. Jahrhundert”, *Vox Romanica* 32, 217–253.
- Rohr Rupprecht (1963) *Das Schicksal der betonten lateinischen Vokale in der Provincia Lugdunensis Tertia, der späteren Kirchenprovinz Tours*, Duncker & Humblot, Berlin.
- Schogt Henry (1960) *Les causes de la double issue de E fermé libre en français*, G.A. van Oorschot, Amsterdam.

- Seguin Jean-Pierre (1999) “La langue française aux XVIIe et XVIIIe siècles”, in *Nouvelle Histoire de la Langue Française*, J. Chaurand (eds), Seuil, Paris, 336–344.
- Thurot Charles (1881 [1966]) *De la prononciation française*, Slatkine Reprints, Genève.

文法家等 (出版年代順)

- Erasmus, Desiderius (1528) *De recta latini graecique sermonis pronuntiatione*.
- Tory, Geoffroi (1529) *Champ fleury auquel est contenu lart et science de la deue et vraye proportion des lettres Attiques*, Paris.
- Palsgrave, Jean (1530 [1852]) *L'Eclaircissement de la langue française*, éd. F. Génin, Paris.
- Sylvius, Jacobus (1531) *In linguam Gallicam isagoge et Grammatica Latino-Gallica*, Paris.
- Bovelles, Charles de (1533) *Liber de differentia vulgarium linguarum et Gallici sermonis varietate*, Paris.
- Meigret, Louis (1545) *Traité touchant le commun usage de l'écriture françoise*, Paris.
- Périon (1555) *Dialogorum de linguae Galicae origine eiusque cum Graeca cognatione*, Paris.
- Estienne, Robert (1557) *Traicté de la grammaire Françoise*, Genève.
- Matthieu, Abel (1559) *Devis de la langue francoyse*, Paris.
- Ramus, Petrus (1572) *Grammaire*, Paris.
- Bèze, Théodore de (1584) *De Francicae Linguae Recta Pronuntiatione*, Genève.
- Bosquet, Jean (1586) *Elemens ou institutions de la langue françoise*, Mons.
- Erondell, Peter (1605) *The French Garden, being an instruction for attayning the French tongue*, London.
- Nicot, Jean (1606) *Thresor de la langue françoise, tant ancienne que moderne*, Paris.
- Maupas, Charles (1618) *Grammaire et syntaxe françoise*, Paris.
- さらにCorpus des grammaires françaises de la Renaissance, Classique Garnierも適宜参照した。